

# 京都大学公共政策大学院

森川 輝一 教授

## ○学生時代について

—現在政治哲学や思想を教えている立場ですが、大学時代はどういった勉強をされていたのでしょうか？

まず、法学部になんで入ったのかについてですが、じつはあまり理由がなくて（笑）。歴史とかには高校の時から多少興味があったんですけど、文学部に行って歴史学なり哲学なりをやりたい、といった明確なイメージは湧いていませんでした。先輩に相談したら「とりあえず法学部に行っとったらい

いんちやう、潰しきくし。」と言われて「まあそういうもんかな」と思って法学部に入りました。

入学したら、当たり前ですけど法律家を目指している人が多いわけですが、（僕は）あまり興味を持ってませんでした。かといって政治学にもあまり興味を持ってなくて…。

そんなときに小野紀明先生<sup>(1)</sup>の政治思想史の講義を受けまして、それがまた独特の講義でして、いわゆる法学や法律学でもないし、実証系の政治学でもないし、文学や哲学の話ばかりしてるような講義だったのです。こういうことが政治思想史ならできると、

なんかちよつと救われた気がして、じゃあ自分もやってみようかな、と。そんな感じですよ。

—大学時代に一番影響を受けた先生という小野先生になるんですね？

そうですね。学校の授業に真面目に出ていたタイプの学生ではなかったのですが、小野先生の講義には全部出ました。僕が学生の頃は、皆さんのように真面目に講義に出る学生はそれほど多くなくて、学校の講義には行かないで試験前に勉強するとかいうのも普通だった

たので。カフェで勉強会とかはしていましたけれど。

—大学卒業後、就職は考えなかつたんですか？

院試に落ちたら就職しようと思つてたんですけど、受かつちやつたんで、まあいいかなと。今考えると、あまり考えずに決めちゃつたのかもしれないですね。なので、大学院に入ってからはちよつと慌てましたね。当たり前ですけど、勉強ばかりされてこられた方ばかりだったから。これは失敗したかなというか、不勉強な私なんか

(1) 小野紀明 (1949-) 京都大学名誉教授。西洋政治思想史を専門とし、初代公共政策大学院院長を務められた。

が来ちゃいけないところなのかもしれないと思つて、修士の時は気分的に結構暗かったですね。

―修士の時には政治哲学の何を学びたいと思つていたんでしょうか？

全体主義に興味があつて、特にナチスのような、要するに一応みんなが選挙で独裁政治を選択しちゃつたということがどうして起こるのかなということや学部時代に考えていて、それにまつわることをやるうというのは考えました。

何とかなるだろうと思つていましたが、修士のうちは自分の意識の低さに驚いていました。ついでいくのが大変でした。他の院生が何をしゃべってるのか分からないし、英語の論文とかも読まなきゃ

いけないんですけど、読み方がよく分からないし……。それなのに、あんまり人に聞けなかった。というか、聞くこと自体申し訳ないなあ

という気がして、修士のときは落ちこぼれ気分が抜けなかつたですね、実際落ちこぼれだつたと思ひますけど。まあ、博士課程に上がるころに、なんとなく分かつてきたのかなつていう程度で。だから、大学院時代は、いつも劣等生意識

が強かつたですね、私こういう感じでいつもへらへらしてますので、周りはそう思つてなかつたみたいですけど。いつも気楽そうではないね森川君、みたいな（笑）。でも、結構悩んだりもしてましたのですよ。

―修士の時の同期とかは分野がバラバラだつたんですか？

そうですね。政治思想史は割とカバーする範囲が広いので、時代、地域や人はバラバラでしたね。

**〇行っている研究について**

―ハンナ・アーレント<sup>②</sup>が研究の対象になつているのは、全体主義の流れですか？

そうですね。あと、私がちょうど大学院に入ったところに、アーレント研究が盛り上がりかけてたんですね。「アーレント・ルネッサンス」とかつていう言葉が出だして、僕の師匠の小野先生もちよつと研究されていたこともあるんですけど、他にも川崎修先生<sup>③</sup>とか、私より上の世代の方々がすぐれた業績を出しておられて、海外の新しい研究動向にも触れたりし

て、面白そうだなと思ひました。

アーレントは、全体主義の研究から出発した人ですが、古代ギリシャのポリスを再評価した人でもあるので、この人を勉強すると古代から現代までの政治思想の勉強がまとめてできるかな、古い時代の思想史も現代政治理論も両方できそうだな、とも思ひました。全体主義が自分の元々の問題関心だったこともあるし。アーレントは政治理論や現代思想の分野でずいぶん人気者になつちやいましたが、当時は今ほどではなかつたので、自分のペースでゆっくり研究できそうだな、とも思ひました。でも、こんなに長くやるとは思わなかつたですね。とりあえず10年くらい、いや10年と決めてたわけじゃないですけど、やってみて今後の足場にしようという風な感じでしたね。

(2) ハンナ・アーレント(1906〜1975) ドイツ出身の哲学者・思想家。全体主義の分析で知られている。主著は『全体主義の起源』、『人間の条件』、『イェルサレムのアイヒマン』など。

(3) 川崎修(1958〜) 立教大学法学部政治学科教授。政治学思想史を専門とし、ハンナ・アーレントの研究で知られている。

—具体的に研究はどのようなことをしているんでしょうか？

僕の場合は、文献を読みこんで論文を書いていくということになるでしょうけど。Aという解釈とBという解釈とCという解釈があったて、その解釈の仕方現代における思想家の意義も変わってくるみたい。その時に、例えばAとBはこういうところがおかしくて、Cはここは悪くないけどここは違って、やっぱりここはDでしよっていう風に新しい読み方の例を例えば提示して、そういうのを論文という形でまとめる。そのため、研究している思想家自身のテキストをまず読み込んで検証していく。自分なりのオリジナルな理論を出す、っていう感じですかね。

—教授になって後悔とかはありましたか？

ある意味私、毎日のようにそういうことを考えてしまいますね、なんでこんな道を選んじゃったんだろって。生まれながらの学者みたいな方、学者になるために生まれてきたような方もおられるわけですが、私は別にそういうタイプではないし。企業とかに就職していたほうがよかつたんじゃないか、と思うこともあります。人と色々話したり、共同作業したりすることはわりと好きなので、こんな孤独な作業ばかりの仕事をなんで選んじゃったんだろう、とちょっと思うていますね。研究者は研究者で、業績を出さないと生き残っていけない厳しい世界です。自分の能力を活かせる道が、もつと他のところにあつたんじゃないか、なんて思ってしまうわけですが、まあそれはもう言ってもしょうがないですね。

非常に優れた人たちと付き合う機会があつて、この人めっちゃめっちゃ頭いいな、すごいこと考えてるな、というすごい人たちと飲みに行ったりできる。そういう人たちと楽しくお付き合いするためには、そういう人たちに馬鹿にされない程度の仕事はしてないといけないわけ、それは励みになります。今度またあの人と楽しく飲めるようにするために、それなりにちゃんと頑張らないとな、という具合に。

—法学部ではどのような講義を担当されているんでしょうか？

学部では、基本的には政治思想史という専門科目と、ゼミと、年によつては政治学入門を持つことがあります。

ゼミでは古典講読と、個人報告をしてもらいながら1年かけてゼミ論文を書いてもらうということをやっています。法学部は別に卒論とかないんですけど、論文を書く

のもいい勉強でしょうという感じでやっています。ただ、法学部のゼミは半期2単位の科目なので、途中（前期）で辞めちゃう子も多いですけど。なので、ゼミ生全員が論文を書きあげるわけではないのですが、1年間がんばって書き上げる学生もけっこういます。

大学院の法政理論専攻では、研究者志望の院生数人で専門書をじっくり読む、ということをやっています。

**○森川先生の研究分野と公共政策とのつながりについて**

—政治思想と公共政策との繋がりについて、どうお考えですか？

政治思想という学問をどう捉えるかによりますけど、アーレントみたいな思想家は基本、現代の政治や社会について、批判ばかりするタイプの人なんです。なにか建設的な提言とかをするわけでは

なくて、現代がいかにまずいかとかいう話をひたすらするので、そういう意味では（公共政策と）直接関係ないと思います。

だけど、公共政策に取り組み、専門家として実務に当たる人たちが、そういう批判的な視点を持つことは結構大切なことではないか、と思います。たとえば、公共性とは何か。「公共性」という言葉を厳密に定義してみようとする、結構難しいのですが、まあこんな感じじゃないの？というふうに皆さんいい加減に考えたりするわけで、そうした基本的な理念や概念を色んな視点から、また過去の伝統や来歴を踏まえて考えてみることでそうした事柄について考え、語る言葉と視点を増やしていく。そういうトレーニングにはなるん

じゃないかと思っています。

実務家教員の嶋田先生<sup>(4)</sup>が授業でロールズ<sup>(5)</sup>やアーレントを取り上げてすばらしい講義をされているそうで、とても人気のある講義だそうですが、それが本当は理想なのではないか、と思います。私は実務のことが分からないので理屈ばかりこねてますけど、やっぱり両方の視点があるのがいいのではないかと思います。実務のことで何も知らない人間が、官僚や実務家をめざす学生さんに何か教えるなんておかしいという思いはありますね。なんか墓穴掘ってますけど（笑）。

—学部生と公共政策大学院生とで違いはありますか？

公共政策には色んなバックボーンをもった学生さんがいて、バラエティーに富んでいると思います。

—学部生と大学院生の違いから、授業で変えている部分等はありませんか？

無意識に相手のレベルに合わせているところはあると思いますけど、ただ私のようなおっさんから見ると、年齢的にいっても、学部生の3・4回生と修士の方ってそんなに違いがないですよ。あと、公共政策大学院の学生の場合、元々やっていたことがバラバラじゃないですか。たとえば、政治哲学古典講読の授業に来ている学生さんも、多くは政治哲学についてはビギナーなわけで、その点では学部

生と変わらないわけです。そういう意味で、特に意識して変えているところはなくて、常に同じようにやっているかもしれないですね。

ただ公共政策大学院だと、世代の近い社会人の方もいたりして、そういう意味でもあまり気を遣わなくても済むかな（笑）。楽しんでやらせてもらってますよ。

—政治思想史の中でここが重要だと言えることはありますか？

原理的なことをとことん論理的に考えることが大事なんじゃないですかね。たとえば、正義とは何か、とか。こういう問題は、古代のプラトン以来2000年以上たっているのに答えなんか出てないすし、これからも議論が続いてい

(4) 嶋田博子（1964〜）京都大学公共政策大学院教授。1986年に人事院に入庁し、同給与局次長、同人材局審議官等を経て現職。主著は『政治指導下の官僚の中立性』（2020年）、『職業としての官僚』（2022年）など。

(5) ジョン・ロールズ（1921〜2002）アメリカの政治哲学者。「無知のヴェール」「重なり合うコンセンサス」などの独創的な概念を用いて、リベラル・デモクラシーの正統性を探究した。

くでしよう。明快な答えが出ないことをやっても意味がない、あるいは実証しようのない問いを弄んでいるだけでサイエンスとは言えない、という批判は常にあるし、滅びゆく学問なのかもしれません。そういう思いもあります。

でも、2000年間答えが出ていないことだからこそ、色んな現実を踏まえて考え続けていくのが大事なんじゃないんですかね。あと、答えが出ないからこそ面白いんじゃないか、そう思ってます(笑)。そういうことを面白がることのできることは、優れた実務家になるための条件ではないか、とさえ思っています。そういう幅をもっていないと、やっぱり実務の世界でも大して伸びないんじゃないでしょうか。

— 公共政策大学院の学生に向けてメッセージをお願いします！

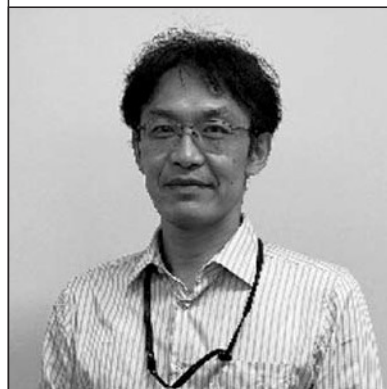
私には何を言う資格もないですけど：自分の実感として、どんな仕事でも、何か一つのことをやり続けて全体のがみえてくるまではない、ちよつと時間がかかると思うんですよね。私の場合は40歳前後になって、ああこういう仕事をしているのかもしれないっていうことがようやく分かったような……。その時期は人によってちがうのだと思いますが、そういうときまでに、分からないなりに色んなことに手探りでチャレンジして、どれだけ蓄積できるかが大切になるのではないのでしょうか。私の場合、大学院時代は劣等生だと思つて過ごしていましたし、無駄に見えることもたくさんしてきたのですが、後になって、無駄に見えたことが無駄ではなく、この仕事

のための準備作業だったんだなつてわかることもあると思うので、特に若いうちは色々やってみるといいと思います。

20代を思い返すと、自分では忙しくしていたつもりだったのですが、今から思うと超暇だったんですよね。今は本当に時間がない中で、色んなことをマルチタスクでやらなきゃいけない年齢になってしまつて、限られた時間の使い方を工夫するしかない。そう考えると、20代の頃は、時間がたくさんあり、目いっぱい使うことができただけだな、と思います。

だから、もつと有効に活用すればよかつたな、何でも寸暇を惜しんでやるべきだったな、と思ひますが、反面、のんびりした時間を楽しむのも学生生活の醍醐味かなとも思います。例えば、友達とだらだらしゃべるとかっつていうのは、私のような年になるとあまりでき

なくなるんですよね。たまに知り合いと飲みに行つて、しゃべりたいことをしゃべつて、ということはあるんですけど、あらかじめ予定合わせてアポ取つておかないといけない。大学院生の頃みたいな、ばつたり行き会つた友だちとその場で話し込んで、何となく話が長引いたので喫茶店行つて、それから飲み屋に行つてさらに突っ込んだ話をする、といった時間の使い方、とても貴重なものだったと思います。公共政策大学院は、学生の皆さんが割とそういう時間を日常的に持つことのできる環境のようなんです、それはすごくいいなと思つています。とことん議論して一晩すごす、というような時間を若いうちに持てるかどうかは、その後の人生に結構大きな影響をもつような気がします。



森川 輝一  
もりかわ てるかず

京都大学公共政策大学院教授。専門は政治思想史。主にハンナ・アーレントの政治思想を研究している。公共政策大学院にて「政治哲学古典講読」、「現代規範理論」の講義を担当（2022年度）。